



はじめに

前回、「どうやったら人は動き始めるのだろうか」という問いから、違和感を安心して持ち続けられる関係について書いた。今回はその問いを、もう少し「場」の側から考えてみたい。人が自分で考え、選び、動くことを私たちは「主体性」と呼ぶ。しかし、主体性とは本当に個人の内側にあり、本人が獲得していく能力なのだろうか。人が主体でいられるかどうかは、その人を取り巻く人や環境、そこで生まれる関係によって変わるのではないだろうか。

一人ひとりが主役の組織は可能か

8月30日、「新しい組織／コミュニティのカタチを模索する1day Gathering」をAtlya参宮橋との共催で開催した。タイトルは「NOT A COMMUNITY BUT A …?」。第1部のテーマは「一人ひとりが主役の組織は実現可能か?」。Atlyaから井尾さん、細野さん、そして宮城の大石さん、それぞれの実践を聞き、考える貴重な時間となった。従業員、経営者、母親、支援者など、私たちはさまざまな役割を持って生きている。しかし、その役割を外したところに「本当の私」がいるわけではない。むしろ私たちは、相手や場との関係によって異なる自分を現しながら生きている。対話のなかで出た「本音」の話も興味深かった。本音でいるとは、感じていることをすべてさらけ出すことではない。誰とどのような関係にあるかによって、何を話し、何を話さないかを自分で選ぶことができる。「本音／建前」「本来の自分／役割としての自分」と分けるのではなく、どちらも関係のなかで現れるその人の一つのあり方なのだと考えると、本音もまた、個人の内側に固定された「真実」ではなく、関係によって現れ方を変えるものなのかもしれない。そう考えると、主体性についての見方も変わる。どこでも同じ「本当の自分」を貫くことではなく、関係によって変化する自分を引き受けながら、その場でどのように自分を現すかを選ぶことも主体性なのではないだろうか。「一人ひとりが主役の組織」も、個人を組織より優先することではない。人と人との関係によって組織が変わり、その組織との関係によって個人も変化していく。リーダーも完成した答えを持って人を動かすのではなく、自分の違和感を場を開き、他者から影響を受けながら考え続ける。「管理から共創へ」とは、管理か自由かという二者択一ではなく、個人と組織の関係を固定せず、そのあいだに起きる変化を引き受けることなのかもしれない。

「つくる」のではなく、つくられていく

第2部はゲストを場の提供者である医療法人である伊東さん、そして高校生と大人を出会わせ続けている山崎さん、そしてはみだすラボから3名の実践者。特に興味深かったのが「中動態」という話だった。私たちは行為について、「自分がする」という能動と、「誰かにされる」という受動に分けて考えやすい。教育でも、「自分で考える」「自分で決める」「自分から行動する」ことを主体性として評価することが多い。しかし、実際に人が動き始める過程は、それほど明確に能動と受動に分けられるものではないのかもしれない。誰かと出会う。知らなかった生き方を知る。何かに違和感を持つ。誰かの言葉が残る。そのような出来事との関係のなかで、それまで動かなかった何かが「発動してしまう」とことがあるという話があった。人は完全に自分だけの意思によって動くわけでも、誰かによって一方的に動かされるわけでもない。人と環境とのあいだで影響を受けながら、行為そのものが生まれてくる。だがそれは、自分自身を徹底して観察できるようになってこそ、「立ち現れる」ものでもあり、「わたしはどう感じているのか」も重要な軸だということも語られた。医療現場が現在の形になるまでの話もあり、最初から完成形を目標として設定し、そのための計画を10年間遂行してきたわけではないという。現場で対話を続け、その都度起きていることを考えながら、10年後にどうありたいかを考え続けてきた。その積み重ねの結果として、振り返れば今の形が実現していたという話だった。ここには、「目標を設定する→計画する→実行する→達成する」という直線的なモデルとは異なる、組織や場の生成の仕方がある。未来を考えていないわけではない。むしろ未来を考え続けている。しかし、その形をあらかじめ固定しない。目の前で起きることに応答し、対話し、必要であれば変え、その連続のなかから次の形が生まれていく。人が育つことも、組織が育つことも、誰かがあらかじめ設定した完成形へ近づいていくことだけでは説明できない。

場を開くということ

8月30日に集まった人たちは、同じ仕事をしているわけでも、同じ考えを持っているわけでもない。一日だけ同じ場所にいて話し、それぞれの場所へ帰っていく。しかし、異なる人の言葉を聞くことで、それぞれのなかに何か残り、また別の場所で次の動きが生まれていく。そう考えると、必要なのは一つの強固な所属をつくることよりも、複数の人や場所との接点が開かれていることなのではないかと思う。そして、これは私が「すみあそび」でしてきたこととも、それほど離れていない。真っ白な紙と墨を前に、自分でもまだ言葉にならない感覚と共にいる。そこで起きることは、本人がすべてを意図して生み出しているとも、外から何かをさせられているとも言い切れない。紙や墨、身体、その場にいる人、その瞬間に現れた線によって次の動きが生まれ、結果として一つの表現が立ち上がる。場についても同じことが言えるのかもしれない。私が場をつくり、そこにいる人を動かすのではない。場を開く私自身も、そこで起きる出来事や対話によって動かされ、場そのものも変化していく。「場を開く」とは、完成形をつくることなく、そこにいる人と環境とのあいだに何か生まれ続ける状態を開いておくことなのではないだろうか。して見ることができるのかもしれない。もう少し実践を続けながら考えてみたい。

朱紅icco (櫻井育子) | 生涯発達研究所TANE代表・はみだすラボ主宰
宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。対話的書家・教育デザイナー。書と対話を通して、人と関係性の生成について探究している。Art Play Worker養成講座、第3期募集中。
研究参画者も募集中です。
<https://ikuko-sakurai.com/>

